

欠席委員意見要旨

【田中委員】

- 行政の課題について、グランパスのリソースを活用して解決に繋げていきたいと考えている。特に子どもの体力水準についてはチームとしても問題意識を持っており、チームとして貢献できればと考えている。
- 人生100年時代を豊かに過ごすためには、健康の維持が不可欠である。そのためには、やはり若いうちから運動・スポーツの習慣を身につけることが重要。愛知県は30代や40代のスポーツ実施率が低いとのことだが、こうした世代に対して働きかけることで、スポーツを通じた健康づくりを意識していただく必要がある。
- 県民のスポーツ実施率を上げていくためには、スポーツを「みる」ことを通じて、スポーツに対する興味・関心を持っていただくというアプローチも有効であると思う。その意味では、アジア大会はスポーツを身近な地域で見ることができる好機であり、アジア大会をきっかけにスポーツ好きな県民が増えていくよう、取組を進めていく必要があると思う。
- 愛知県ゆかりの選手を発掘し、育成する取組も重要であると思う。技術の向上もさることながら、人間力を育て、世界から評価される選手に育てていくことが重要であると考えている。また、技術的にも人間的にも優れた選手を輩出することができれば、“その選手を育てた地”として愛知県への注目が集まることにもなると思う。
その点、チームでは昨年度から「名古屋グランパス SDGs ACADEMY」を開催しており、参加企業と協力してSDGsへの取組を進めるとともに、多世代交流を通してアカデミー生の人間性を育てる取組を行っている。こうした取組を広げていきたいと考えている。
- また、アジア大会は愛知・名古屋への注目が集まる絶好の機会である。愛知県には、最近で言えばジブリパークなど世界に発信できるコンテンツもあり、また我々が気づいていない、隠れた魅力もたくさんあると思う。大会に向け、こうした魅力をいかに発信し、知名度を上げていくのかを検討していく必要があり、それがレガシーにもつながっていくと思う。

【中嶋委員】

- 昨年度実施したアンケートにおける、障害のある方のスポーツ実施率が全国値と比較して低かったことについて、要因を簡潔に指摘することは難しいが、やはりスポーツへの“アクセスのしやすさ”が求められているのではないかと感じている。
会場まで介助なくたどり着ける方、移動に介助が必要な方、障害の程度によって実態は様々であると思うが、大会や教室などが開催される場所が地域に近いほど、参加に当たっての障害のある方やその家族の心理的なハードルが下がっていくと思う。
- その意味では、これまで健常者向けに開催されていた大会やイベントなどが障害者も参加できる形となり、誰もが参加できるようになれば良いと思う。最近では東京2020大会以降で知名度が上昇したボッチャを中心に、こうした動きの萌芽が見られるため、さらに増えていけば良いと思う。
また、対象を障害者に限定した大会やイベントよりも、継続しやすいものになると思う。
- 障害者のスポーツ振興に関して、学校に在籍している間は意欲さえあればスポーツに関わることができるが、卒業した途端に受け皿が少なくなってしまうことが課題の一つであると思う。実際に、例えばスポーツ大会の参加案内について、特別支援学校をはじめ市町村の社会福祉協議会や福祉施設等にも対象に幅広く発信しているが、応募いただくのは特別支援学校の生徒が中心である。
- 障害者スポーツに関する大会やイベントを開催するに当たり、やはり施設の確保は課題の一つである。その意味では、4月に開校した「にしお特別支援学校」の体育館はバリアフリーに配慮され、障害者スポーツ団体や地域住民に開放されると聞く。こうした取組が広がっていくとありがたい。

【淀川委員】

- 働く世代や子育て世代の取り込みが必要と書かれているが、地域スポーツの取組でも、世代交代が進まない現状がある。仕事や子育てが忙しく、なかなか始めることができないとの話をよく聞く。やはり、気軽に運動ができる機会や、気軽に行くことができる場所を提供することが必要なのではないか。
- また、子育て世代に関して言えば、親子で一緒に参加できるイベントがあれば、保護者も気兼ねなく参加することもでき、効果的かもしれない。
- コロナの影響もあるかもしれないが、個人で運動・スポーツに取り組んでいる話はよく聞く。職場のクラブで活動している方も多と思う。そうした方に、なぜ地域でのスポーツ活動に参加しないのかと聞くと、“知らなかった”という声が多かった。運動・スポーツへの意欲は低くはないと思うため、地域のスポーツ活動につなげるための情報発信が必要であると思う。
- 「ゆるスポーツ」を皆で実践する機会があった。広い場所を必要とせず、ルールも簡単で、老若男女問わず、また障害者も一緒に楽しむことができた。スポーツイベントを企画した際も、ランニングよりもウォーキングの方が参加者がはるかに多い。こうした誰もが簡単にできる運動・スポーツを通して、県民のスポーツの実施を促進していくというアプローチもあると思う。
- 子どもが運動・スポーツに親しむためには、スポーツを通じて達成感を味わわせる機会をつくっていく必要があると思う。“これができた”、“次の目標までもう少し頑張ってみよう”など、少しのきっかけで運動・スポーツに目覚めることがある。そうしたきっかけをいかにつくり出すのか、いかに意欲を持続させるのかという点が問われている。